

6 1 《ラザロの復活》カラヴァッジョ

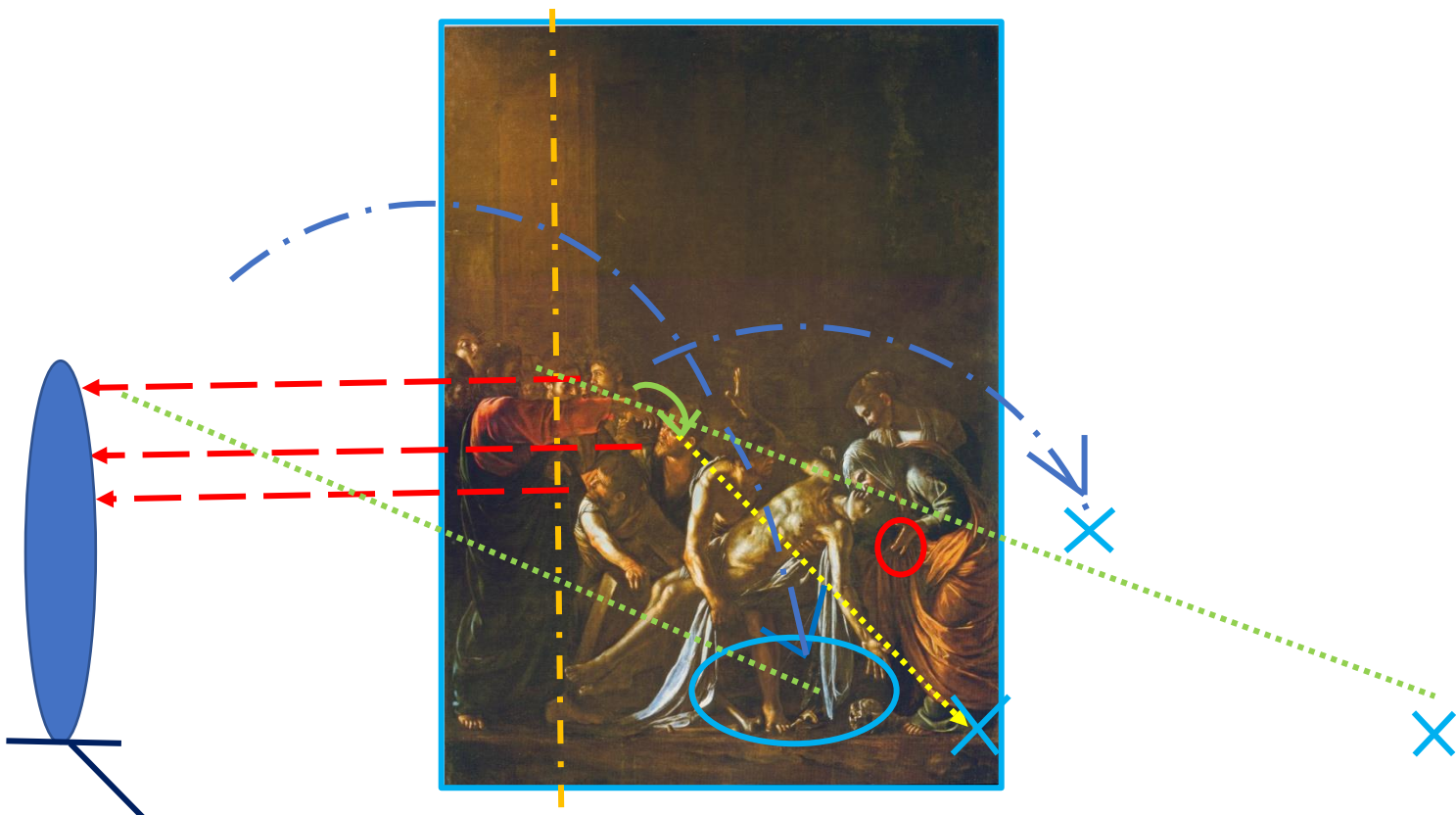
指差していないイエス・動態連想絵画

2024 (2013)

真鍋友範

2013年に一度ネット論文【眼鏡の聖マタイ】中で発表しているが、再度取り上げる。

いきなりだが、この絵画を分析しよう。



実際のイエスの立ち位置 《ラザロの復活》1609 カラヴァッジョ

- * 指差していないイエスに注目です * グリーン曲線は手首の動きの軌跡
- * グリーン点線はイエスの視線（目と手の甲を結ぶ線・左側が正しい）ブルー曲線は、あそこを意味するカーブ線 * ライトブルー輪は穴掘り位置 * レッド輪は驚いたポーズの手
- * レッド長破線は人夫の視線 * イエロー点線は誤った解釈の指差しポーズの穴掘り位置

1 イエスの腕と手首に注目

イエスの立ち位置は、描かれている位置ではない。墓掘り人夫たちが注目する視線の先だ。

また、イエスの指定したラザロの墓の位置は、力なく曲げた指の先にあるのも無い。これは、カラヴァッジョの《聖マタイの召命》同様に、腕と手首を回した動作に示す、【あそこ】だ。

つまり、イエスが実際に立っている画面外の位置から【あそこ】を示すと、それは実際にイエスを取り囲む墓掘り人夫たちのいる地点であり、そこがラザロの墓であった場所だ。

先ずは、以上を正確に把握する必要がある。

絵が読めない美術史家が、イエス是指差している、と言いきう場面だが、イエス是指差していない。

この絵画には、次の場面が凝縮されている。

1) 現れたイエスに気づいた墓掘り人夫がイエスに注目する。2) イエスは、『あそこを掘りなさい』と言う。3) 墓掘り人夫は墓を掘る。4) ラザロが蘇える。5) 近くの親族はこのラザロの蘇りに驚く（見た人の驚きを、手の動作で表現している。）という一連の物語の場面だ。

従って、一瞬のスナップ写真ではなく、時間変化による各場面が合成表現されている。カラヴァッジョが得意な【動態連想絵画】なのだ。

【動態連想絵画】とは、一連の時間変化の流れの中での登場人物の動きを、合成表現することにより、見る人は、段階的にその変化を読み取る中で、生き生きとした動画として感じる絵画様式をいう。

この《ラザロの復活》において、逃亡途中の、晩期に当たる時期のカラヴァッジョが、最初に世に出し名声を博した作品《聖マタイの召命》と同じようなイエスの腕の動作、そして登場人物の動作の時間変化をじっくり読み取ることで、そこに【連続性】とともに、動画を見るような楽しみ方を与えたことは、まさに【ルネサンスには無い、バロック絵画ならではの革新的動態表現】であったと言えるだろう。

この絵画には、左右空間の絵画面外への広がりや、時間の流れの中の登場人物の動作の変化が描かれていて、実にダイナミックである。

当時の人たちは、カラヴァッジョの描いた聖書内に記されたイエスの奇蹟の

ストーリー展開を、段階を踏みながら、強烈にイメージ再現できたのだ。

だからこそ、この絵画内容を読み解いた当時の画家たちや知識人はカラヴァッジョを高く評価したのだ。

残念なことに、17世紀の、芸術家では無い、デッサン素人の美術史家ベローリには、この解析能力が無かったのだ。

カラヴァッジョの実際の実力、革新的な写実表現力がまるで理解できない美術史家であったが、その後の西洋美術史は彼の誤った解釈に気付かず、その誤った解釈をそのまま受け入れて現在に至っている。

カラヴァッジョは指差しポーズを基本的には、描かない画家なのだ。(ただし、一部例外はあるので、真実の見極めが課題。)

つまり、《聖マタイの召命》の中のイエスも、《ラザロの復活》のイエスも、どちらも【指差していない姿のイエス】なのだ。